

派遣者番号	管R5K03	氏名	今川 健治
研究主題 —副主題—	教員一人一人の資質・能力を高める人材育成 —若手教員を対象とした「マイクロOJT」を通して—		
派遣先大学	玉川大学 教職大学院	指導担当者	田原 俊司 ・ 高岡 麻美
所属	大田区立東蒲中学校	所属長	小松 重樹

キーワード：マイクロOJT 経験学習理論 資質・能力向上 持続可能

要旨： 学校現場に求められる教育課題が増加し、その課題も複雑化・多様化が進む中、教員一人一人の資質・能力を向上させることが重要である。しかし、教員は多忙で日々目の前の業務に追われている現状がある。これらを踏まえ本研究では、Kolbが提唱した経験学習理論などを基に「マイクロOJT」を定義付け、OJTを受ける教員と行う教員から成る2組による「マイクロOJT」を実施し、量的研究及び質的研究によって分析した。

研究の成果は2点ある。第一に、「若手教員に対し効率的に『マイクロOJT』を実施し積み重ねることで、OJTを受ける教員及び行う教員の学習指導力（授業力）が高まる。」という研究仮説が支持されたことである。第二に、「マイクロOJT」による教員の負担感がほとんどなかったことから、多忙な中でも取り組み始めやすく、持続可能なOJTだと言えることである。一方、OJTを受ける教員及び行う教員の属性の多様化を目指すなど、「マイクロOJT」の有効性を更に高めることが課題である。

I. 研究の背景と目的

近年、学校現場に求められる教育課題が増加し、その課題も複雑化・多様化が進んでいる。中央教育審議会(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について(答申)」では、こうした中、教員の資質・能力の向上が重要であるが、「教員の大量退職、大量採用の影響等により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況」があると指摘されている。また、若手教員を中心に、OJTにより新たに時間を確保して、教員一人一人の資質・能力を高める多くの研究がなされてきた。こうした研究は人材育成として一定の効果があると考えられるものの、教員は多忙で日々の前の業務に追われている現状がある。そのため、新たに時間を確保して行うOJTは日常的・継続的に実施することが困難であり、教員一人一人の資質・能力を高める機会が損なわれてしまう可能性があることが課題である。そこで本研究は、若手教員を対象に限られた時間の中でどのように効率的にOJTを行えば、教員一人一人の学習指導力(授業力)が高まるのかという、OJTのより効果的な手法を明らかにすることを目的とする。

II. 研究仮説と本研究が目指すOJTの姿—「マイクロOJT」—

1. 研究仮説

若手教員に対して限られた時間の中で効率的に「マイクロOJT」を実施し積み重ねれば、OJTを受ける教員及びOJTを行う教員の学習指導力(授業力)が高まる。

2. 「マイクロOJT」とは

「マイクロOJT」とは次の①から④の条件を全て満たすOJTを意味する。①できるだけ勤務時間の中で、内省的観察及び抽象的概念化に関して5分から10分程度で実施すること、②Schönが提唱したリフレクション概念や、Kolbが提唱した経験学習理論に基づくこと、③OJTを受ける教員が、自律的に教員としての資質・能力を高めていくことができるようにすること、④OJTを行う教員が助言・支援を通して自らの授業を省察し、改善すること、である。「i:自ら設定した目標に向けた授業実践(具体的経験)、ii:省察(内省的観察)、iii:手だての一般化(抽象的概念化)、iv:次の授業実践(能動的実験)」という一連の効率的な取組を「マイクロOJT」サイクルとして実施する。

III. 検証方法と検証結果の分析

1. 検証方法

都内公立中学校において、令和5年10月23日から11月28日にかけて、OJTを受ける教員とOJTを行う教員から成る2組(それぞれ外国語科と数学科)が各教科週1回から2回、計6回ずつ「マイクロOJT」を実施した。検証前後に個別に半構造化面接した回答、「マイクロOJT」における省察時の対話の内容、及び6点の研究開発物の中で「授業省察シート」【授業者版】【助言・支援者版】の入力内容を基に検証した。

2. 検証結果の分析

(1) 量的研究による分析

検証前後における各質問項目に関する回答は、4件法(4:あてはまる~1:あてはまらない)により実施した。OJTを行う教員及びOJTを受ける教員に分け、各質問項目の平均値を求めた。

量的研究による分析について2点述べる。第一に、OJTを行う教員に関する検証前後における半構造化面接



図1 「マイクロOJT」の手順【助言・支援者版】(研究開発物)

の回答結果（全 11 項目）である。検証前後で平均値が上昇したのは、「若手教員に助言・支援したことを生かして、自分の授業を改善するようになった」（3.5 から 4）などの 6 項目であった。第二に、OJT を受ける教員に関する検証前後における面接の回答結果（全 10 項目）である。検証前後で平均値が上昇したのは、「日常から振り返ったことを生かして、次回以降の授業実践をするようになった」（3 から 4）などの 6 項目であった。

（2）質的研究による分析

「マイクロOJT」の効果について、研究仮説を踏まえKJ法を用いて分析した中で、本稿では3点を取り上げる。なお、Aは外国語科のOJTを行う教員、Bは数学科のOJTを行う教員、Cは外国語科のOJTを受ける教員、Dは数学科のOJTを受ける教員である。「マイクロOJT」の効果の根拠は〔 〕に示す。

第一に、助言・支援したことを生かして、OJTを行う教員の学習指導力（授業力）が向上したことである。[ちょっとでも（自分の学習指導力が）上がったと自分自身考えていました。（省察で学んだことを）取り入れたことで（生徒の）活動内容がちょっと進歩しました。（A）]:自分ももうちょっとやった方が良くなんてことも含めて話をしたので、自分も取り組まなければいけないです。（中略）説明させると子供は理解が深まるので、発言させる方がいいかなと思って実践するようになりました。（B）]。

第二に、助言・支援を踏まえ授業改善したことで、OJTを受ける教員の学習指導力（授業力）が向上したことである。[アドバイスがあって、実際に反映させることができ、より分かりやすい授業を行えるようになったのかなと思います。（C）:教え合いの時間を多く取ったりすることで、生徒が自分からやりだすようになり、（中略）分かりやすい授業ができるようになってきたのかなと思います。助言の影響は大きくあります。（D）]。

第三に、限られた時間の中で「マイクロOJT」を実施し積み重ねることに対して、教員の負担感がほとんどなかったことである。[5分から10分という時間設定が適切だと思います。（AからDの全教員）:これ（「マイクロOJT」）をやること自体に負担感はないです。立ち話程度でも構わないと思います。（D）]。

IV. 考察

上述の検証結果を根拠として考察したことを3点述べる。

1. 学習指導力（授業力）向上に関する効果【OJTを行う教員】

検証結果から、助言・支援することは、授業者の学習指導力（授業力）を向上させるとともに、自らの授業を振り返りOJTを行う教員の授業実践に生かすことで、自らの学習指導力（授業力）を高める機会にもなっていたことが明らかにされた。そのため、「マイクロOJT」を実施し積み重ねることで、授業者と助言・支援者双方が影響し合い、共に学習指導力（授業力）を高めることができると考える。

2. 学習指導力（授業力）向上に関する効果【OJTを受ける教員】

検証結果から、助言・支援者の問いに答えることや、授業改善に向けた助言を参考にすることがあり、授業者の学習指導上の課題や改善策についても、授業者の視点に加え助言・支援者がどのように指摘するかを複合的に考え、授業改善できるようになったことが明らかにされた。そのため、「マイクロOJT」を実施し積み重ねることで、授業者の学習指導力（授業力）を高めることができると考える。

3. 限られた時間の中で「マイクロOJT」を実施し積み重ねることに関する効果

検証結果から、授業準備時間や放課後という勤務時間の中で、5分から10分程度という限られた時間において「マイクロOJT」が実施できたことが明らかにされた。中学校においては、教員同士の時間の都合が合わせにくいという実態があり、OJTを実施する時間設定が課題となることが多い。そのような多忙な中でも「マイクロOJT」は効率的に実施でき、教員は負担感をほとんど感じないことから、教員の学習指導力（授業力）の向上に向けて効果的なOJTの手法のひとつだと考える。

V. 研究の成果と課題

成果は2点ある。第一に、「若手教員に対し限られた時間の中で効率的に『マイクロOJT』を実施し積み重ねれば、OJTを受ける教員及びOJTを行う教員の学習指導力（授業力）が高まる。」という研究仮説が支持されたことである。第二に、「マイクロOJT」による教員の負担感がほとんどなかったことである。さらに、「今後も『マイクロOJT』を行いたい」という検証後の半構造化面接におけるAからD全教員の回答結果から、多忙な中でも取り組み始めやすく、持続可能なOJTだと言える。

課題は2点ある。第一に、「マイクロOJT」がどの教員にとっても資質・能力を高めることができるのかを検証するため、OJTを受ける教員の属性とOJTを行う教員の属性の多様化を目指すことである。第二に、教員が身に付けるべき資質・能力として挙げられる、学習指導力（授業力）に加え、生活指導力・進路指導力、外部との連携・折衝力、学校運営力・組織貢献力においても「マイクロOJT」の有効性を検証することである。